平成３０年度第２回弘前市総合教育会議　会議録

日時　平成３１年１月２３日（水）
午後２時から３時３０分まで
場所　岩木庁舎２階多目的ホール

◇議事日程
１　開会
２　市長挨拶
３　議事
・協議事項　「教育に関する大綱について」
４　閉会

◇出席者
弘前市長　櫻田　宏、教育長　吉田　健、教育長職務代理者　前田　幸子、
教育委員　澤田　美彦、教育委員　高木　恵美子、教育委員　村谷　要

◇司会及び説明のため出席した者の職、氏名
教育部長　野呂　忠久
教育政策課長　菅野　昌子

◇その他出席した者の職、氏名
教育委員会理事　奈良岡　淳
学校づくり推進課長　三上　善仁
学務健康課長　中田　和人
学校指導課長　木村　文宣
教育センター所長　三上　文章
生涯学習課長　戸沢　春次
文化財課長　成田　正彦

午後２時００分　開会

○市長（櫻田宏）
本日は、お忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。
平成３０年度第２回弘前市総合教育会議の開催に当たり、ご挨拶を申し上げます。
この会議は、教育委員会制度改革の一環として、市長と教育委員会が、教育の課題やあるべき姿を共有し、連携を強化しながら、教育行政の推進を図ることを目的に開催してい

るものであります。
　人口減少と少子高齢化が進む中で、時代の変化に柔軟かつ的確に対応し、そして、弘前市が持続的に発展していくためには、地域を担う人財を育て、将来にわたって活力のある地域づくりを進めていかなければなりません。
　今年度は、昨年７月に開催したこの会議で『教育に関する大綱について』協議し、大綱の基本的な方向性を確認したところであります。
　本日は、この「弘前市総合計画素案」を基に教育委員の皆様と「弘前市の教育」について意見を交わし、教育政策の方向性を共有しながら、教育に関する大綱（案）を決定したいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げまして挨拶といたします。

○市長（櫻田宏）
　それでは、協議に入りたいと思います。協議事項は、『教育に関する大綱について』であります。
　まずは、事務局から説明をお願いします。

○教育政策課長（菅野昌子）
　教育に関する大綱についてご説明いたします。
　「教育に関する大綱」とは、教育基本法第１７条第１項に基づき、国が定める教育の振興に関する施策等の基本的な方針を参酌し、地方公共団体の長が、その地域の実情に応じて定める『教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の目標や根本的な方針』のことを言い、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律第１条の３第１項」において、地方公共団体の長が策定すること、策定する際には、総合教育会議において、市長と教育委員会との間で十分に協議、調整することが重要とされております。
　この「大綱」に記載する事項といたしましては、予算や条例等の地方公共団体の長の有する権限に係る事項についての目標や根本となる方針のうち、「教育、学術及び文化の振興に関する目標や施策の根本的な方針」となります。
　目標や施策の根本となる方針を定めるものであり、施策の詳細について策定することは求めておりません。また、当該市が教育振興基本計画やその他の計画を定めている場合には、その計画をもって「大綱」に代えることができるとされております。
そして、「大綱」に記載された事項につきましては、市長および教育委員会がそれぞれ所管する事務の職務権限に基づき、執行していくこととなります。
　当市ではこれまで「大綱」を弘前市経営計画の教育関連分野をもって代えることとしてまいりました。
　そして、平成３１年度からの、新たな「大綱」案につきましては、昨年７月に開催しました第１回会議の際に、弘前市の教育についていろいろご意見をいただきながら基本的方向性を確認したところです。
　その基本的方向性のもと、今後取り組まなければならない教育政策につきましては、新しい総合計画と整合性が図られていなければならないと考え、皆様からいただきましたご

意見も含めたかたちで、「弘前市総合計画」策定に向けた作業を進め、昨年 12 月 21 日に素案を公表、同日からパブリックコメントが実施されております。

今後、各方面からの意見を踏まえた修正を行いながら、議会の承認等を経て今年度中に策定の予定となっております。

それでは次にお手元の資料をご覧いただきたいと思います。

資料は２種類あります。Ａ４版横、両面印刷したものは、総合計画素案の教育関連分野を一部抜粋したものです。Ａ３版縦片面印刷したものは、総合計画素案の基本構想や前期基本計画の教育関連分野を体系図にまとめ、第１回総合教育会議の際にいただいたご意見等のキーワードを関連する施策の下に掲載したものとなっております。

それでは、Ａ４版横の資料をお開きください。

弘前市総合計画素案のうち、教育関連分野は、１９ページ～２７ページの「Ⅱ基本構想」部分と、２９ページからの「Ⅲ前期基本計画」のなかの、３１ページの基本方針、３６ページ～４５ページのリーディングプロジェクトの部分、そして分野別政策については、５１ページ～７１ページの①学び、７２ページ～７７ページの②文化・スポーツ、１５４～１６１ページの⑪安全・安心、１８０ページ～１８７ページの⑭景観・文化財の部分であります。

一つずつ見てまいりますと、

まず、１９ページ～２７ページの「基本構想」では、当市の将来都市像を定め、長期的な展望のもと、総合的かつ普遍的な市の方向性や政策の方針を示しております。将来都市像を含め、政策方針等のすべての項目において「教育、学術および文化の振興に関する総合的な施策の目標や根本的な方針」が含まれております。

次に、「基本計画」は、基本構想で定めた将来都市像を実現するための具体的な施策などを示したもので、前期および後期に分けており、前期基本計画では、３１ページにありますように、５つの基本方針を掲げ、さらに重点的に取り組み、効率的かつ効果的に推進する５つの「リーディングプロジェクト」を３６ページより設定しており、それぞれの項目において「教育、学術および文化に関する総合的な施策の目標や根本的な方針」が含まれております。

そして、政策を１６の分野に整理した分野別政策においては、５０ページからの「①学び」の政策と１５４ページからの「⑪安全・安心」の政策に、学校教育および生涯学習に関する施策を位置づけ、１８０ページからの「⑭景観・文化財」の政策には文化財の保存・整備および活用に関する施策を位置づけしております。

なお、７４ページからの「②文化・スポーツ」の政策には、文化芸術活動およびスポーツ活動の振興に関する施策を位置づけておりますが、この分野に関しましては、市長の権限において執行していくこととしております。

弘前市総合計画素案における教育関連分野についての説明は以上となります。

それでは、今後の、当市における「教育に関する大綱」案につきましては、市の教育政策の目標や根本的な方針が含まれている、「弘前市総合計画」素案の「教育関連分野」をもって代えることにつきまして、ご協議をお願いいたします。

教育長（吉田健）

法で定める教育に関する大綱ということですが、これから定めていくに当たり、現在、市で進めている総合計画、これは必ずしも教育委員会が所管するものだけではないのですが、こういったものは、不易流行と言う言葉がありますけれども、どちらかと言えば、教育の場合は不易の部分が多いかと思います。２、３年で結論を出すというよりは、５年、１０年、２０年といったスパンで、長い目で考えていかなければなりません。そういったところで見ると、これから教育委員会が抱える課題や、前回出した意見が全て網羅されているな、というのがまず率直な意見です。

その中で、これから教育委員会でどうやっていくか。これに沿った形でやっていくにはいい具合にまとまっているのかなと考えております。

これから教育を考えていく上で、第一に考えなければならないものの前提条件として、今非常に大きな教育改革の波が来ています。どちらかというと、義務教育の分野では、学習指導要領が変わるといっても２年後、３年後で、まだちょっとという状況ですが、これを国全体で考えてみると、現在の高校１年生が３年生になる２年後には、大学の入試制度が変わります。これまで大学入試制度が何度か変わってきましたが、大きな変更ではありませんでした。これからの変更は、学力について定義が変わっています。今まで、どちらかというと、知識偏重と言う形でペーパーテストができれば、それなりのいい大学に入れたということから、思考力であるとか、読解力であるとか、判断力であるとか、意欲だとか、コミュニケーション能力であるとか、そういった総合的な力が求められる人材を育てていかなければなりません。そのような観点から、義務教育の方も学力というところの見直しからしっかりと、情報化であるとか、国際化といわれている時代に乗っていけるような人材を作っていかなければならないという考えであります。

これからのそのようなことを考える場合には、学校教育、今子どもたちを中心にお話ししましたが、その子どもたちを支える親世代であったり、弘前市民全体を巻き込んで、全体で子どもを育てながら地域を巻き込んで、地域全体が学んでいく。そのような仕組みづくりが、これから時間をかけてでもやっていかなければならないと考えております。

その中で、３つぐらい課題があると思います。１つは、弘前市の教育環境を見直して、どんな児童生徒でも等しく学べるような環境を整備する。それは、エアコンのことであったり、トイレのことです。トイレは、不快に思えば勉強もできなくなってしまうので、意外と大きな要素を持っております。それからＩＣＴとか。いま子どもたちはゲームを通してＩＣＴが身近なものになっています。ＩＣＴを教育で大いに利用するということは、都会の子であっても弘前であってもきちんと整備するということを、時間をかけてでもやっていかなければなりません。もう既に取り掛かって決まっているものもありますが、順次整備していく必要があります。２つ目としては、地域と学校だけでは解決できない、教室だけでは解決できないという言い方でもいいでしょうか、先生だけでは解決できない。子どもを考えるときには、地域の力を結集していかなければならなりません。幸い、弘前市は全国に誇れるだけの歴史と文化のまちで、文化財が豊富にあります。そういったところ

を利用しない手はありません。今まで埋もれていたものが、もう一度呼び起こして、どんどん活用していくことを考えなければなりません。３つ目として、最近は職員が非常に疲れています。多忙化といわれていることから、教育委員会として道筋を立てなければなりません。例えば部活動のあり方です。学校の先生が部活動の顧問になるのは当然だ、という考え方がいいのか。考え方から見直し、見方を変えることなども大いに議論していく必要があると思います。それから、先生方が忙しくなっているわけですが、教育改革の波であるとか、新しい子どもたち、新しい時代の中で育つ子どもたちを教育していくためには、先生自身が勉強しなければなりません。そのようなところで、研修がどうあるべきかを教育委員会をあげて、お金をかけるところはお金をかけて、いろんなところからご意見をいただいて進めていかなければならなりません。

このようなところが前回も話題になったところですが、市長も含め不易の部分をやっていかなければならないところが見えてきたのかと思います。

教育委員（前田幸子）

前回のこの会議で、前期の学校訪問の報告とともに教育の環境の要望にさっそく応えていただきました。教育長がお話ししたように、トイレやエアコン、さらには、市長が自ら先頭になった通学路の（桔梗野地区の、テレビで見ました。）除排雪をしていただいて、安全面が（子どもたちを取り巻く環境）良くなってきているなと感じます。そこで、後期の学校訪問は１０月でした。小学校１２校に中学校５校の１７校訪問させていただきましたが、そこでは、前期とは違ってそれぞれの学校らしさというのがたくさん見られて、学校ならではのよさが発揮されている、と感じることができました。校長、教頭の話があったのですが、端的にいえば、昨年は大変だったけれども、今年はだいぶ良くなった、という話をされます。そこで思ったのは、どうしたらそれが良くなってきたのだろうと。そして、先生方のどんな対応が子どもたちを変えたのだろうとか、保護者への学校としてのアプローチはどんな点が良かったのだろうというところがこれからの教育には大切だなと。プロセスが大切なのではないかなと、重要性を感じました。

それを見つることができないまま、掴みきれないままだと、また同じ問題が起きてしまうだろうし、解決できない。そのためにもやはり教員の質向上が非常に大切な部分で、喫緊の課題かなと実感しました。

ひとづくりのためには、ひとづくりをする「人」を作らなければならない。ひとづくりをする「人」を育てなければならない。これが、教育委員会としての最も大きな施策の１つと思いました。

教育の課題も見えてきたことで、学力の向上という点で秋田の話題が出てきたのですが、弘前でも早くから自立的な学習の習得を掲げています。それはどうしたらいいのだろう？と考えました。そこで、大館の公開授業を見に行ったのです。そこでは、私たちがいつも学校訪問に行ってみている子どもたちとは一味違うという感じがしました。というのは、弘前の子どもたちは受身的な、先生が教えて子どもたちが動くというようなスタイルですが、大館では、子どもたちにやらされている感というのが全くないのです。子どもたち自

らが、問題を見つけ、互いに話し合いながら解決に結び付けており、その方向性(道路がいっぱいあって、その道路を間違わないように先生は交通整理してくれている。)を正してあげる。ここが違う。子どもたちは授業をすごく楽しんでいる。楽しくてしょうがないのです。それを考えたときに、沖縄では、学力テストが最下位でありながらも、「なんくるないさ」と気にしない、そのような性質を持っている、とよく聞いてきたのですが、最近は目覚めて、秋田方式で、先生方を秋田から呼んで、先生方も勉強しています。子どもたちもだんだん学力が上がってきて、すばらしい勢いでいい方向に向かっているということです。

弘前の子どもたちも、いいところをたくさん持っているので、それを引き出す教師力が大切だと思います。教育委員会としてもどうやって道筋を立てて、導いてやったらいいのか、という点が課題です。ただ、やることはわかっているので、やればいいだけの話であって、そこを村谷委員が勉強しているのです。

教育委員(村谷要)

秋田県は所得が非常に低い県です。学力は所得に比例するという話もありますが、小、中で秋田県がトップなのはなぜだろうと思い、ネットで秋田県のホームページを探してみると、非常に分かりやすい。ホームページに情報が出ているのです。基本的な方針から具体的にどのようなことをやっていくのかまで全部出ております。一方青森県は、探せません。ホームページを見てもそのページだけが探せません。秋田県は、地域のスローガンも出ていますし、家庭教育のスローガンも出ており、非常に分かりやすい体系になっています。

見ていくと、５０年前一番下のほうの学力だったのですが、その段階から少人数学級を５４億、５６億かけて採用し、どんどん先生を増やしながらやってきているという情報を見ました。でもそれだけではない。やり方の話も先程ありましたが、「授業が楽しい」という点について。４０人も５０人もいると、子どもたちが手を挙げて間違った解答をすると恥ずかしいようなことがありますが、それをなくする。間違った解答をどんどん出させて、そこから方向整理していくという授業をする。その結果、秋田県の試験の解答は、空欄がないのです。回答しないではなく、考えて書く。それに対し、他の県は空欄が多い。分からないとそのままあきらめてしまう。そうではなく、自分で考え、組み立て、解答を導き出すというところが非常に大事です。その中で、先生方の研修のシステムを見てびっくりしたのですが、どこかの学校に行って、その学校を見るだけではなく、能力の高い先生は全部の学校を見てあげる制度や、先生だけではなく、全国の小･中学生を秋田に短期もしくは長期留学しながら勉強するという制度もあります。問題点も言われていますが、とにかくやってみる。その中で軌道修正しながらトライしているのだろうなというところが垣間見られて、非常に面白い活動だなと思いました。

今この時代ＩＣＴという話も出ていましたし、大学、高校、中学校と教育改革がどんどん進んでいく中で、少子化の中でといったときに、やはりポータルサイト的な、子どもたちが見に行ける、そういったものを整理しておくと、教材の卍学なんかも紙で刷らなくて

も、教材として使えれば、非常にコストを抑えながらも、様々な展開ができるのではないでしょうか。

市長にも工場見学に行っていただいた「木のダンボール」、特許庁長官賞をとりましたが、ああいう情報（地域の中でそのような産業があって、世界に向けて仕事をしている。）を子どもたちに(大人もほぼ知らないので)知ってもらう。そのような企業が弘前市内にはたくさんあります。例えば、テフコ青森さんという、実は高級時計の文字盤のシェアが世界の７～８割の企業があります。ヨーロッパから有名なブランドが、デザイナーとの打合のために弘前に来るんです。こちらから行くのではなく、しかも円建てで輸出しているので、為替差損もない。そういった商売をしています。そういった世界的企業があったり、ブナコさんも当然そうですし、知的財産というのが非常にたくさんある地域です。その辺も卍学でやっていくのに、刷り物ではなくてポータルサイトを作ってデータを一元化して、授業のほか、ネットで（いまはそういう授業もできるので）見せていけるような、そして子どもたちも自由に見に行けて、分かりやすいような。今堀江組さんが今月２８日にいらっしゃるというお話を聞いています。「弘前をつくる」という冊子、あれも是非ネットで見れるような仕組みがあるといいと思っています。来月の１９日には、木のダンボールについては、今井産業さんで端材が出るので、そちらを教育の現場で使ってもらえるよう打合せに行きますし、どんどんそういった情報もネットで見れる、当然紙も場面によっては必要ですし、ただそれはダウンロードできればいいだけで、様々なものについて情報発信、活用というところがまさにＩＣＴになるのかなと思います。

吉野町の美術館に関しましても、２０２０年４月オープンに向けて、現在教育委員会の担当部局と吉野町の担当部局と話をして、見学コースを作ろうという提案をさせていただいております。当然、美術の展示、コミュニティの場、教育の場であるので、教育の場の使い方を、出来上がる前に、工事している過程も見て、イメージを持って、できたときにはすぐ使えるような仕組みを今どんどん進めて行っております。具体的なところも出していければなと。そうすれば地域の産業とコミュニティとを繋げていけるような。そこには当然大学生、高校生も絡みますし、実は、実業高校の生徒には、「美術館の活用方法」をテーマとして研究チームにおいて、美術館の運営会社のメンバーともお話ししている状況です。大学生も巻き込みながら進めていければと思っております。地域に密着した教育現場は、街中に史跡関係を含めたくさんあります。それについて、サイトをどんどん使っていけるような仕組みも１つあっていいのではないかなと。テレビもラジオも、新聞もチラシもありますが、メディアをミックスして使ったほうが効率的だと思います。そういったものを基本構想から前期の基本計画、このペーパーの中で１つ１つ具体的なものを、まさに教育長から総括的にお話があった中で１つ１つ具体的にどう進めていくのかというのを教育委員会の中で検討していく必要があると思います。

秋田のそういったお話も、まさに教育の制度の中で教育現場をどうマネジメントするかというのは、仕組みをきちんと作らないと。一生懸命やっている先生方もたくさんいるので、そのノウハウが、その先生がいなくなったら変わるのではなくて、ずっと回っていけるような仕組みづくりが一番大事だと思います。

市長（櫻田宏）
　実際、この間一緒に今井産業、ランバーテックに行って、ダンボールより丈夫で合板よりも軽い、そしてデザイン性もある、というのが身近なところにあったというのが驚きだったし、たぶんそのようなところがほかにもたくさんあります。

教育長（吉田健）
　弘前には技術が優れているところがすごくあります。

教育委員（村谷要）
　是非子どもたちに卍学で、冊子でなくネットでいいので。

教育長（吉田健）
　卍学というのは決まったものというより、とにかく弘前に関係するものは卍学です。テキストはもちろん最低限のものなので、色々独自性を出せばいいと思いますし、やはり弘前の特性である、今お話のあったものづくりとかその環境というものもありますので、いろいろ活用すればいいと思います。

教育委員（村谷要）
　あらゆる分野の知的財産というのは、製造から商業から様々ありますので、子どもたちにどんどん知ってもらう。そのためには、先生方がまず勉強をしなければなりません。特許庁の技術官がいつでもいいよと言ってくれています。無料で来れるそうです。発明クラブを含め、放課後の活動でもいいでしょうし、そのようなものをどんどん進めるのも面白いかなと思います。

教育長（吉田健）
　まず、どこかの学校がやってみて。いいものはどんどん広がると思います。

教育委員（村谷要）
　先日、中学校の校長会にお邪魔して、ＷＥＢコンテストのご案内をしました。第１回目は石川中学校が最優秀をとりました。あとは附属中。ＷＥＢコンテストでは学校の周りの情報を出して欲しい。史跡とか神社仏閣ではなく、学校の周りの情報を子どもたちの目線で情報発信をするのです。得た情報をＧｏｏｇｌｅマップの中に埋め込んで、子どもたちの目線の情報を発信することを今進めています。卍学として、今までは紙に書いて発表していたのをＷＥＢでというのを石川中学校でやりたいなと校長先生がおっしゃっていましたので、これを広めていければと思っております。

市長（櫻田宏）

どうしても紙媒体で、また、歴史、文化というので過去を学ぼうというのが卍学になっていたのではないかと。今を学ぶという。

教育長（吉田健）
それも立派な卍学ですね。

市長（櫻田宏）
そうですよね。
大館は、それほどよかったですか。

教育委員（髙木恵美子）
見ている私たちが、一緒に授業の中に入り込んでしまい楽しめました。小学校の子どもたちが非常に生き生きして、あっという間の１時間でした。子どもたちも、もう終わっちゃうの？という感じで。何人も授業を参観している人がいても、全然臆することもない。子どもたちは、今の授業を楽しみながら学ぼうという姿勢がすごいなというか、このような環境で学べるというのは、目標を定めてやっているのが低学年から中学校までつながっているという様子を見させていただいて、それを見ていると、もしかしたら保育園とか幼児期からかかわり方がぜんぜん違っているのかなと思いました。
今、少子化なので子どもたちが少なくなってきている中、（今イクメンも増えてきているので）弘前市も活動をしていて、子どもに関わる親御さんの意識は、前よりも高まっていると思います。その中で、地域と共に自分の子どもたちを育てていくという基盤がきちんとしていれば、どんどん地域と共に、先生と子どもたちもいい関係を保ちながら小、中、高といけるのではないかなと思います。そこは、幼少期からの関わりと小学校でのＰＴＡの関わりも大きい課題かもしれないと思っているところがあります。保育園や幼稚園の頃、結構関わりが多かったのですが、小学校に入ると学校の先生だから任せてしまっていいのではという親御さんだったり、関わるとちょっと遠慮してしまうというか、どこまで関わったらいいのだろうというような親御さんも多かったりします。また、配慮が必要な子どもだったり、そのような子どもが友達にいたときに、親としてどう関わっていったらいいのだろうとか、いろいろな環境面での関わり方を模索しながら進むところもあるような気がします。そこを教師と共にみんなで個性だという考えで、みんなが見守りながら育てていけたらなと思っています。

市長（櫻田宏）
大館には何か照会があったのですか。

教育長（吉田健）
パンフレットやホームページで見たと言っておりました。

教育委員（前田幸子）
　これは行かなきゃいけないと。

教育委員（髙木恵美子）
　行って正解でした。

市長（櫻田宏）
　大館はすぐ近くです。青森とあまり変わりません。
　以前は、県境というすごく高いハードルがあったのですが、このハードルを越えようということで、今、市の観光では、大館能代空港利用促進協議会に今年度から加入しました。負担金を出して。大館空港も弘前にとっては空港です。大館空港は大館からちょっと先にありますよね。高速道路が空港の目の前まで、空港から３０秒のところに入口があります。そこから弘前市内まで１時間１０分ぐらいです。青森空港はというと、１時間弱であまりかわらないのです。朝と夕方２便しか飛行機が飛んでいませんが、青森空港にはないちょうどいい時間帯なのです。

教育委員（髙木恵美子）
　駐車場が無料で。

市長（櫻田宏）
　県境を越えたら、秋田県の国会議員の方が、弘前市は秋田県弘前市を目指しているのか？と。そうしたら、大館市長が逆に、大館市が青森県大館市を目指していると。そのぐらい大館市長との関係はいいのです。
　今の話を聞いて、もっと大館市とのいい事例を、こちらから行って学ばせてもらって、また向こうからも来てもらうという関係ができればいいなと思います。

教育委員（前田幸子）
　いいところはどんどん吸収していけば。お互いに向上していけるので。

教育委員（村谷要）
　大館のほうが先行して動いているので、そちらのほうに視察に行ったり、もちろん連携ということが出てきます。

市長（櫻田宏）
　誘致企業関係でも、大館市は今ＩＴ産業的なものを東京都渋谷区と連携をしていて、大館はどんどんそこで伸びていくという方向性を出しています。産業の面やいろいろな面を含めての広域のつながりとか。隣ですのでそのつながりを出していけるのかなと思います。

教育委員（村谷要）

木のダンボールのなみなみは、曲げわっぱの技術です。製作機械は能代の工作機械でコラボしているのです。

市長（櫻田宏）

子どもたちを見たうえで、大館、秋田、能代を見てみると、その地域ならではのものだと気づきます。そのような身の回りにある今のすごいものをたくさん学ぶ機会があり、そこで将来を模索できるかなという気もしていました。

教育委員（澤田美彦）

弘前市の総合計画の素案をかなり読みました。色々なことが書かれていて、本当に良くまとまっているなと思うのですが、これを具体的にどのように実行できるのかな、あるいはどのようなことを実行したらいいのかな、と考えたときに、私自身の気持ちの中に少し足りないものがあると思っています。

私は理系の人間ですので、中学校も高校も国語は勉強しませんでした。理系の科目をたくさん勉強したのですが、３０歳前にアメリカで２年間生活する機会があって、そこで何が大事か、それは言葉です。いかに国語（英語でなくて）が大事かというのを痛感しました。

帰ってきてから自分のために国語をたくさん勉強して、これを誰かに伝えていこうということで、子どもたちにいろいろな本を読んでもらいたいと活動を続けてきました。弘前市の教育にはいろいろなやり方がありますが、国語力をいかに伸ばすかをやってもらいたいです。弘前市の教育の中では、国語力を伸ばすことを謳っています。これがどこかに入っていれば面白いなと思ったのですが、探しても見つかりませんでした。

医師の研修だとか大学、看護学校での教育、医師会の看護専門学校での教育、この教育の中でやはり大事なのは国語です。もちろん、ちょっとした数学的な知識あるいは物理的な知識があると、いろいろな世の中で起こっていることを理解するのがたやすくなるのですが、でも国語力がないとそれを自分で解釈できない。自分で思っていることを人に伝えることができない。国語力をいかに伸ばすかというのを教育の本当の基本にしないといけないと思い、私はいろいろな活動をしてきました。

私たちは朝起きると、日本語で生活して、ＬＩＮＥもＹｏｕｔｕｂｅも日本語です。私たちの生活そもそもの発端というのは言葉。言葉から始まります。日常生活と国語は切り離せません。友達や親と話をする。全て国語です。ただ単に、当たり障りの無い会話は国語力が要らないと思います。批判するわけではないのですが、今の英会話の教えている内容とか、表面的なことしかやっていないのですが、そのようなことは言葉を覚えたての子どもでも話をしています。私たちが大人に近づいてくる、世界が広がる、社会も広い、色々な感情が心の中に現れてくる。それを言葉で表す。表せるのが人間としての成長だと思っているのです。

国語をきちんと勉強しておくと、言葉にならない気持ちが言葉にできるようになる。よ

く暗黙値と形式値というのがありますが、形式値というのは言葉にする、数字で表す、図表で表す、そのようなものに表せるようなものが知識。私たちは、人とやり取りするときは形式知でやり取りをしています。

ほぼ全員、言葉で表す以上の気持ち、何百倍の思いを自分達は頭の中に思っていますが言葉で表現できない。言葉では表現できないのですが、そのような思いがたくさんある。それを暗黙知といいます。私たちがコミュニケーションをとるときは、自分の暗黙知をいかに形式知にうまく転換できるか、形式知に転換してほかの人とやりとりする。ほかの人の考えを自分のところに入れて、自分の暗黙知の中で検討して、また新しい考え、新しい行動する。そのようなことをやっていると思うのです。その基本になるのがやはり言葉だと思います。言葉がないとそのようなことができない。

だから、３０過ぎてから、放課後が一番重要だと思ったのです。

とにかく、自分の思いを自分の言葉で相手に伝える方法、それには訓練、勉強が必要です。このようなことを教育でやってもらいたいと思います。

もちろん、自分の暗黙知の持っているところをうまく言葉に表せないと正当な反論ができないとか、理不尽なことも言わないで、気持ちの中にしまいこんで生活していくしかない。やはり、言葉は人を守る、言葉は人生を豊かにする。このようなのがあるので、国語を大事にした教育をしてもらいたい。そのようなことを是非入れていただきたいです。

市長（櫻田宏）

いいですね。今、パブリックコメント中ですので。

教育委員（澤田美彦）

２月に看護師の国家試験があるのですが、国家試験の問題は、今まで１行で、次の中でどれかを選ぶものでした。今は、そのような問題ももちろん主体なのですが、わざわざ３～４行の問題を作るのです。何を見ているかというと、知識というよりは読解力です。国家試験で読解力を見ますといえば、学校で読解力を教える教育をしなければならない。そのように結びついているのです。ただ単に知識とかそのようなものではなくて、やはり自分で学び、考える。そういったものが世の中で要求されている、ということが国家試験を見ただけでも理解をすることができました。

その基本は、何度も言いますが、国語です。日本語です。決して英語ではありません。

教育委員（村谷要）

全くそのとおりだと思います。私も会議所に入る前、海外に赴任していた際、同じように国語が一番大事だなと思いました。国語がきちんとしていると、外国語が学びやすくなるのです。１つ外国語を覚えると、第２外国語も分かりやすくなる。国語が一番のベースになります。読解力がないとあらゆる問題、ものが見えないので、本当にそのとおりだと思います。

教育委員（澤田美彦）
　英語も大事です。グローバル社会なので。

教育委員（村谷要）
　逆に大きくなってから勉強して十分だと思います。

教育委員（澤田美彦）
　私もそうだと思います。

教育委員（前田幸子）
　先日放送された「世界ふしぎ発見」を見た方、手を挙げていただけますか。
　皆さん見なかったのですか？
　（博物館長が、いのしし（いのっち）がパリに出張していると教えてくれた）「世界ふしぎ発見」１５００回記念でパリを取材して、弘前市の例の「いのしし」（いのっち）が出たのです。すごいでしょ。弘前市民として感動しました。きちんと「弘前市立博物館」と出て、テレビの前で一人興奮していました。そのようなことがあると、弘前もこのようにすばらしいところなんだということを発信することもできるし、子どもたちが卍学の該当ページで勉強しているときでも先生方が語ってあげられる（世界ふしぎ発見で出ていたこと）。
　博物館長から、いのししの話を聞いていなければ、集中して見ていなかった。ところが、パリが出たので、これはもしかしてと思い必死に見ていたら、出たのです。いのしし年だからなおふさわしいということで放映されたのではないかと思います。弘前もいいな、鼻高々だなと思いました。

教育長（吉田健）
　言葉とか、国語が大事ということが、国家試験に結びつくということですが、やはり高校入試でも、大学入試でも、これからの大学入試は問題文がやたらと長くなるので、読解力がないと書けないという方に完全にシフトしてきています。一方、先生方の授業はどうかというと、秋田を見習わなければならないと思います。いいところはどんどん吸収して、弘前のいいところが、「いのっち」みたいに出てくると、それが誇りにつながります。国語もそうですし、弘前のいいところをどんどん出していって欲しい。

市長（櫻田宏）
　弘前のいいところといえば津軽塗があります。日本全国にかなり出ています。先日、福岡県福岡市及び北九州市にりんごの販売で行ってきました。福岡市の博多で案内された懇親会場が津軽塗のテーブルだったのです。全国で、例えば旅番組や、サスペンスドラマなどに旅館がでてきます。その旅館のテーブルが津軽塗だったりするのです。そのようなところについて、産業面を含めて、学校の中でも話をしていけたらと思います。身近なものとしてもっと見る目が育っていくのではないでしょうか。

教育委員（村谷要）
　市長の眼鏡も津軽塗ですよね。ちなみに私のも津軽塗です。

教育委員（前田幸子）
　高いのでしょうか(値段)？

市長（櫻田宏）
　特注です。村谷委員から紹介して頂いて、

教育委員（村谷要）
　上塗りのお金だけなので。私は７～８千円だったと思います。市長の眼鏡は面積が大きいので。

市長（櫻田宏）
　１万５千円です。

教育長（吉田健）
　それでも、そのような値段で買えてしまう。

市長（櫻田宏）
　ただ、４ヶ月かかりました。

教育委員（村谷要）
　眼鏡を預けておくのです。

市長（櫻田宏）
　眼鏡を買ってきて、塗り物を津軽塗の主にお願いする。模様はこんな感じでと。

教育委員（村谷要）
　そうすると、このようになります。オーダーメイドの世界です。

教育委員（前田幸子）
　弘前から発信していけばいいよね。
　福井ばかりが眼鏡の製造で有名だけれども。

教育委員（村谷要）
　津軽塗は元々オーダーメイドから始まっています。殿様が、職人の持っている塗模様で、「これでお椀をつくってくれ」とか、「鞘を塗ってくれ」とか。輪島は行商の世界ですけ

れども。

教育委員（前田幸子）
　テレビで３人の研修生が出ていましたよね。
　その方は、先日研修が終了しましたよという方ですか。

文化財課長（成田正彦）
　あれは、文化財的な研修ではなく、産業としての連合会で行っている研修です。なので、素人が始めてあのような形になっています。

教育委員（前田幸子）
　主婦の方と、東京の大学院を出た方と弘前の方との３人。あのようなことをテレビでどんどん発信することが必要ですよね。
　もう一つ聞きたいのが、漆の金継ぎという技術がありますよね。あれは弘前ではできないのでしょうか。

文化財課長（成田正彦）
　すみません。私はちょっと分かりません。

教育委員（前田幸子）
　あの茶碗・・・。

文化財課長（成田正彦）
　あれは、こちらではできないと思います。

教育委員（前田幸子）
　例えば、漆があれば。

教育委員（村谷要）
　技術的にはできます。

教育委員（前田幸子）
　できるでしょ。

教育委員（村谷要）
　ただ、やっていないだけで、技術的にはできます。
教育委員（前田幸子）
　できるよね。割れた茶碗に、まず漆を塗って、上に金をやって。

教育委員（村谷要）
　漆って接着剤なのです。塗料でもあるし。

教育委員（前田幸子）
　誰かがやれば。そのようなことも発展していきますよね。

教育委員（村谷要）
　作品として確かあったと思います。

教育委員（前田幸子）
　いくらでもいいものが弘前にあるよね。

教育委員（村谷要）
　小学校１、２年だったと思います。ＢＵＹひろさきで、子どもたちに知ってもらおうと、今回りんごではなく、津軽塗を紹介する下敷きを配布することを商工のほうで進めております。

市長（櫻田宏）
　先日、マツコデラックスで津軽塗の箸をやっていましたよね。
　そのようなものにも採り上げられています。
　それを地元でもっと知って、少し流れに乗りながら子ども達にも伝えていくというようなことができればいいのかなと思います。

教育委員（村谷要）
　情報でもう一つ。
　今イタリアのワイナリーが表敬訪問されたのですが、アジアで、女性で初めて選ばれたジュエリーのデザイナーさんがいるのですが、その方が津軽塗でワイナリーの最高級ワインをイメージしたジュエリーの製作に入っています。そこのワイナリーというのが、イタリアの北部ですけれども、かなり有名で、園地に現代美術館をたくさん置いて、アートを応援する活動をされている。そこで選ばれた津軽塗のジュエリーというので、４月以降に東京の高島屋含め、サントリー含め、販売の準備をしているという動きもあり、津軽塗がどんどん海外に出て行っています。ミラノコレクションで発表したり、そのほかにも行っています。

市長（櫻田宏）
　動きがあるのがもっとわかるようになればいいですね。

教育長（吉田健）
　津軽塗は塗りの工程がすごいじゃないですか。そのうち、簡単なところだけを子どもたちに体験とか。

教育委員（村谷要）
　できますね。例えば、一番簡単な肯定が研ぎ出しで、これだとかぶれもしません。あとは、絵の具を使って模様をつけるところまでを授業の中でやったりしております。

教育長（吉田健）
　そのようなことが、どんどん、どこの学校でもできるようになれば。美術の時間にそのようなことをやっているのでしょうか。

教育委員（前田幸子）
　美術でも技術でもやっています。

教育長（吉田健）
　弘前らしいものをどんどん体験できれば。

教育委員（澤田美彦）
　自分が生まれ育ったところを知っているというのが大事です。先ほどの英語の話ではないですが、英会話とか英文法が正しかろうが、英単語が分かっていようが、日本の神社の赤いのは何なの？という質問が来ると答えられないですよね。だから、自分が生まれ育ったところを知っているという、その上でないと英会話でも全然成り立たないですよね。とにかく、自分のところを知る、というところでは卍学はすごくいいと思います。強制的にでも１度触れさせる。そのあと年をとってから、「あのときなんかやったな」と。そのようにすればいいと思います。

市長（櫻田宏）
　「あのときのそれがこれだったんだ」とか。

教育委員（澤田美彦）
　最初から理解するわけがない。

教育委員（村谷要）
　地元のもの、アイデンティティを知っているか、接しているか、それを説明できるかが一番求められますよね。
教育長（吉田健）
　外国に行かなくとも、東京に行くとか、東京の学校に行くとき、友達同士で話をすると

きにも弘前のこととか話ができれば。それは身をもって経験しておりますので。

教育委員（髙木恵美子）
　自分の住んでいる地域のことですら分からなかったり、町内のことですら。

市長（櫻田宏）
　だから卍学があるのですが。弘前を読み解く本というのを観光コンベンション協会でつくったのを、高校を卒業した人たちに１冊ずつ持たせてやりたい。首都圏に行っても、県外に行ってもどこに行っても、「弘前から来た」と言うといろいろ質問されるじゃないですか。そのほとんどが分からないので。１つずつ覚えていって、答えていけるように。

教育長（吉田健）
　弘前については、すごく知っている人もたくさんおりますし、「ひろさき」ではなく「ひろまえ」という人もおり様々なのですが、きちんと分かっていればいいですよね。

教育委員（前田幸子）
　自慢できる弘前だよね。

教育長（吉田健）
　それを育てていかなければならないですよね。
　それも、自分の言葉できちんと言える人を。

教育委員（澤田美彦）
　自ら学びとか、そのようなものをやるのですが、知識を強制的にでも植えつけなければならないのは、例えば小学校低学年（小学校高学年もかもしれないが）にも自ら学ぶというのが必要かもしれません。基本的な知識は、叩き込んででも教えるというのが必要です。それを基にしてモノを考えるとか、そのようなことがでてくるのであって、基本的なこともぜんぜん知らないで、考えてやってくださいといっても、結論が出るわけないですよね。

教育委員（前田幸子）
　それは無理です。

教育委員（澤田美彦）
　小学校・中学校の基本的な学力（基礎学力）、私が関係している学校ではすごく足りない。それから中学校、高校（高校をスルーしている学生がたくさんいます）。中学校辺りで基本的なことをきちんと学んできてくれればもう少し話を理解できると思うのですが。ちょっと話をしても理解できない場面がすごく多いです。だからこそ、強制的にでもやることが大事だと思います。

教育長（吉田健）
　新しい教授法とか知られている中でも、昔からの一斉授業とか、そのようなものの良さというのも絶対必要ですから、どう組み合わせるかなんですよね。

教育委員（村谷要）
　また秋田のほうに戻るのですが、秋田県が家庭学習を重要視しており（教育委員会でスローガン５か条みないなのがあります）、やはり家で復習を必ずさせる。予習はしなくていいので、その日に習ったことを復習するということをやっている。

教育委員（前田幸子）
　どこにポイントを置いているかというと、自分で（例えば徳川家康、織田信長など自分で勉強するという。自分が勉強したいもの、興味のあるものをノートに書いていって、それが勉強になる。まだ、弘前では宿題の指示、義務的である。そうではなく、自分が好きなものを学ぶという、そのようなことで個性が伸びる。

市長（櫻田宏）
　その頃のものって忘れないですよね。

教育長（吉田健）
　小さいときに覚えて、その後子育てするときにまた覚えたり。そのときは子どもと一緒に学ぶ。

市長（櫻田宏）
　子どもたちが育つという点では方向性が見えているのですが、学校現場では大変だなというのはあるのですね。

教育委員（髙木恵美子）
　自分の子どもの参観しかしていなかった中で、いろいろな学校を見て回ると、学校によって全く異なるということが教育委員になって、良さだったり、課題だったりを見せていただいているので、教員のひとづくりと言うのは、大事な課題だと思いました。

市長（櫻田宏）
　先生方も日々一生懸命やっていただいているのですけれども、勉強する時間がなかなかとれないといいますよね。先生方の学びの機会をどのようにして作っていければいいか。

教育委員（髙木恵美子）
　やることがありすぎるとか。私は教師の仕事が分かりませんが、宿題を見るのも、提出

物を確認するのもそれだけですごい量だと思います。

教育長（吉田健）

まじめにやろうとすると、やることがたくさんありすぎますが、先生方に全部やって欲しいというよりも、小学校であれば子どもともっと遊んでもらいたいだとか、接する時間は確保してもらいたいというのがあります。なかなか忙しいので、我々ができるところは、忙しいところを何とか解決策を見つけてあげることだと思います。少し大きなテーマだとは思いますが。先生方はそれでなくとも、勉強することとかたくさんありますので。親から求められるものとか、回りの期待にこたえようという使命感もある。

教育委員（澤田美彦）

今、宿題の量は前に比べてどうなのでしょうか。よく、置き勉とか、教室の後ろに教科書とか置いていく。そのような流れもありますが。

理事兼学校教育推進監（奈良岡淳）

学校間あるいは学年間の差はずいぶんあると思います。宿題を全く出していない学校は、逆に無いでしょうけれども、量的なものは十分検討したうえで出していると思います。

教育長（吉田健）

発達段階に応じてある程度やっていかないと、高校ぐらいになって、やれなくなると困るので、宿題もなければいけないと思います。先生方が見なければならないとなると、負担が大きいかもしれません。

教育委員（髙木恵美子）

ネットの時代、何でも調べることができ、情報も得ることができるので、逆にその情報で心病む子どもたちもたくさんいます。ネット環境というのもこれからの大きな課題になると思います。もちろんネットパトロールをやっていますけれども、見えない部分が結構あります。子どもたちの間でのトラブルもあるようです。

教育長（吉田健）

禁止だけではダメでしょうね。

そのような時代なのですから、上手に付き合う方法を作っていかなければならない時代ですね。

市長（櫻田宏）

ダメだといわれても、大学になると分からない情報をネットで調べなければならない。

社会に出たときにどうしていくのかというところも参考としていかなければならない。

教育委員（澤田美彦）

ネットのいわゆるフェイクニュースとか、そういったものを判断するためには、やはり基礎学力、学校で勉強したことや考え方をきちんと身に着けて、どうやって読むかとか、情報を取捨選択するかとか、そのような力をつけていかないといけません。例えば私だと、今、インターネットが無いとか、スマホが無いと成り立たないです。調べ物だとか、いろいろな連絡だとか。世の中がそうなのだから、これは禁止とかではなくて、将来的には積極的に学校でやっていくことが必要だと思います。

例えば、医師会の理事会等でわからないことがあったりすると、誰かがタブレットを持ってきていると、すぐに調べて「こうですよ」とか言ってくれます。前だと「持ち帰って次のときに」、といわれていたものですが、すぐその場で解決してしまいます。今はそのような世の中ですから。

教育長（吉田健）

研究発表会のときとか、タブレットを持ってきて、すぐ調べてチェックできます。

教育委員（髙木恵美子）

でも、調べたいときに調べることができるとすごくすっきりしますよね。

教育長（吉田健）

大学の先生なんかも当たり前になっています。

市長（櫻田宏）

小･中学校はこれがダメなのでしたか？

うちの子でも、分からないところをすぐ聞くのですが、お父さんがスマホで調べる。スマホを持たせているのですが、スマホで調べるという習慣がなくて、これほど便利なものは無いと最近気がついてきて、何かあれば調べる。

教育委員（澤田美彦）

健康情報なんかであれば、検索した回数が多いと上位に来る。それが必ずしも正しいとは限らない。やはり、そこをきちんと教育しなければならないと思います。検索してもらうために、フェイクニュースなどをわざわざ出すわけだから。使い方等が教育としてやってくれたほうがいいのではないでしょうか。

市長（櫻田宏）

話が変わりますが、学校を地域で活用することとか。地域の方々の人材を活用するものがあるのですが、学校現場を地域の方々が活用するという学校開放に近いようなこと、先生方にとってはハードルが高いことだと思いますが、方法としては、先生方の情報だけではなくて、地域の情報を学校で接する機会があるということができないかなと。

教育委員（前田幸子）
　やっているところはあります。

市長（櫻田宏）
　以前、地域のおじさん･おばさん達がたむろしてくれているだけで防犯になるということを伺ったんです。そのような意味では、地域の方々が学校にいて、子どもたちがグラウンドを使っていない時間帯があれば地域の方々が使えるとか、そのような方法を検討していかなければならないのかなということについて、どう感じますか？

教育委員（前田幸子）
　それはもう、積極的にやっていくべきだと思っていますし、もうやられているところもあって、学校訪問をしたときでも、校長先生から、「今の時間、外を使わないので、地域の方に使わせているんですよ。」と言われるなど、いろいろやられているので、どんどん進めていったほうが、お互いにＷＩＮ－ＷＩＮの関係でいい方向に向かうと思います。

市長（櫻田宏）
　今回、エアコンの整備をするということも、なかよし会を学校でやってもらえればいいなと。今後１０年ぐらいの間に学校を使っていける。なので、夏に授業をしているとき２８度を超えるのが８日間程度ですが、夏休み期間中になかよし会とかあるので、そこを使っていく。１０年間ではできませんが、児童館的なものとなかよし会を整理して、学校を中心にやっていく。学校を地域の方々が空いている時間帯に使っていくというような場所にできれば、コミュニティの場になるのかなと。

教育長（吉田健）
　地域の方々が入ってくるのはいいと思うのですが、一方で防犯上の問題とかもあります。しょっちゅう来てくれれば顔見知りになるので、１回２回とか、１ヶ月に１回とか、１年に１回だと難しいのでしょうけれど、しょっちゅう来るような関係を築くというのがまず大事かなと。どんどん地域の方に開放すれば、普段も子どもたちを見てくれるので、通学路を歩いているときなど。

市長（櫻田宏）
　普段から顔を出していればいいですよね。私、参観日にしょっちゅう行っていたので、小学校から学年が上がっていくじゃないですか。今、中学校三年生ですけれども、私が行くと普通に「お父さんが来た。」といわれます。市民会館で先日、合唱発表会があり、見に行った際に、一番後ろにこっそり座っていたのですが、一番前の生徒が振り返っていて、「お父さん来たよ。」と言っているのです。小さいときから顔を出していると、みんなに認知されます。そのような関係を作っていければいいのかなと。

教育委員（村谷要）
　石川小、中の研修会を見に行ったのですが、おじいちゃんおばあちゃんがかなりいて、学校の中に溶け込んでいるのです。そんな学校もあるんだなと。

市長（櫻田宏）
　親も一緒になって先生の話を聞いて勉強するとか。
　コミュニティの場としての学校の役割も中に織り込まれているので、あとはどのようなやり方をしていくのかということを、現場の先生方の声と方向性をすり合わせながら進めていければなと思っております。

教育長（吉田健）
　市内も広いので、地域によって温度差があるかもしれませんが、できるところから。

市長（櫻田宏）
　一斉にいかなくとも、それも全部学校の個性という。それぞれ発表していくことでお互い吸収していくかなと。ここも、計画の中で盛り込んでいければと思います。

市長（櫻田宏）
　今日は、お互いの意見を聞きながら、情報共有をいたしましたので、これに基づいて大綱案を決めたいと思います。
　これまでの大綱は経営計画の中に盛り込んでまいりました。今後も大綱案については、総合計画の中に内容を盛り込んでいくということでよろしいでしょうか。

教育長及び教育委員全員
　はい。

市長（櫻田宏）
　それでは、弘前市総合計画は基本構想部分が議決事項となっておりますので、今後、議会の議決を経て弘前市総合計画が策定された後、本市の教育に関する大綱について、弘前市総合計画の教育関連分野をもって代えることで決定したいと思います。
　本日の議論・意見交換にて、教育政策にかかる目標や基本的な方針を共有し、方向性を一致させることができました。
　今後も連携を強化し、弘前全体がまるごと学びのまちとなるよう共に取り組んでまいりたいとおもいますので、どうぞよろしくお願いいたします。
　本日はどうもありがとうございました。

午後３時３０分　終了